貞女
全傳
千代物語
九

へ13
3037
9

門へ13
3037
巻 9

子代物語 後編 巻の四

目録

十 桂鬼入道書冥山のる
阿呼房のる
○ 宗覺僧徒の場被ある
尊 尊駄天房のる

金竜の山い吾妻の冒頭をうらふゆちよの名ふもあり
東里山人

千代物語後編 巻之四

東都 鼻山人編著

十七

桂鬼入道書寫山へ登事

附り阿呼房のる事

まきふ與らんとするやそ〳〵微祥あり形ちあまび別ち教現し声あれば列ち嘶音意おのおの〳〵柿桂鬼爵右エ門入道い夾の氷の日彩愛間も命惜まれて西仏法師を殺し今只何ぞあら

永井信さんと恩恵をうけし摂州書写山に今
五院といふ坊に尚時醫右エ門が妹婿の伯父に
無ふありしと見一度二度相知りたりしれば出ぬ山に
住ふ者あり全く全院五ふ対面し侍る大門家の縁
乱ふ伝り廣住元秋時の運ふ乗じて中出を平
均せしうども某〜あくまでも大門家の恩顧忘
れずいうぞう五燭のいまゝ城破るべき今の世の
うれるをも知らず彫る業の楽とやなりとい

此事山に学ゆる霊場あれば頼〜ぶ一區の地をも
借うう見無の耳をも注ぐ絶等の安心をも究わ
ざやと遥〜来行くまのりゆと旅〜中ふ宿ま
うそが院五の義弟猪ふ把ぐて我家ふ宿〜
無く能ふいうう日をうぬけ山ハ里まで〜〜
答法〜無と思ぶ見究竟の石あれば接泉ハ
道も良安堵〜と者うう比院の同宿ふ河内
房とて学ゆる熟侍あうりとハ叡山ふあうぶ

初年より武藝を好み力量抜群人に優れ
一日に七八十里の道を走り給へば矢名を韋駄天
房と称し給へるとぞ人に勝れ双の勇びの上手にて
世に比べなく金銀財宝を奪へる物を持ちたびその
ゆゑ形ばかり絵に画き山を追出されけれども
今は世に年老ぬれば向後をあらため善提の外
他事なく行ひすまして居給へる桂鬼入道も
今は名を浄因と称し仏の韋駄天なり

分にてうろうろ歩く新〻にうぐ受けたる方
駆捷に優れ艾なれば若も無川ぐ不縁の者我を
業体来さらん時助太刀をも乞まんとおもや遠
背もあるまじと若新母〻に物ひて音うけ
去程に大高左京無川勢負に彼者の武
うち立て上方さして出発り久ぶ援列に左京が
卿なり娘婿の迎ひいさう相新〻る去あり
無情に立寄て敵を尋ねる由聞て

のいひるをもへ當時京師の方々は好ごみ乱れて
又貴門豪〳〵なれば故ある者大方此辺に居らへ
居れば付き書写山に金胎院といふ坊の立ち
果〳〵年来の熊毫ひはまく此西を西塔とあつく
惜〳〵の旗宿と定めるひ近辺の清泉をも学び
いんに上あきに堂のうといへども無ぶべとて此立
戎塔〳〵金胎院へ宿借んるひを認めこれを人金胎
院立書より早撃〳〵義借あくれば人よく

二人を分抱〳〵立〳〵人の佐ふ四方の書信をいひ
学せるさすぐに一山のるるれば法国法師ぞ
上り立る無れども法国今い容堂人都世差て
昔も似ず書ふ九条面をもちず戦員を
後に入れたれども抜れといはのひあざ〳〵法
国い下国ふるより立やと寄〳〵れば人のうち
安らず金胎院へ寄ふ人を聞いて書信をや
に縁ひあ記載を賜へのごもあいぶせんと

安ど殺ひろる打鼻 南玉浮田の奥方ゐ嬢姫
あうて毒害の策斗ありろふ其のろゐ毒殺して
ちらちのこゐふ殺うたる荒井茂兵川猪久門と
いろる者飯を出奏して其の珍味あうぎきび〳〵
誰あとも此あ人を召捕へ出を者あい手〳〵悪賢完
行ろべ〳〵と解られろふ浮国是を要て究者の
斗策を案ど出〳〵金売ゐ中ろふ此猪玉の
宇まうう尋探ゐ荒井川猪のあ人いうまゐ殺子

細あうてう金拾兎ゐ悪び者うゐ〳〵毒殺ゐ
よびあべゆ〳〵茂一山の雑美あべ〳〵あられ出坊よう
金拾兎ゐ中のうゐ此あ人を召捕て茂出茂
大きある茂れあべ〳〵その拾ふ捨亜ゐ殺者
大ひある弟ひあべ〳〵と吉られば金売大きふ
殺ろき者ろふ金拾兎へ殺といひ者ろふ金拾兎
い此者どもゐ者ろの者あほとの拾ふすた
亜ゐと金殺釈〳〵られば浮国ゐ毒見殺〳〵ゐう

ゐること二人共遊拂ひ其の後寄ることを聞付て
親さんのもとへ参りて金沢院の男子の俗二人を
近付てくやくろふ此程共院ふ悪ひ者ひあくの
仕方の事の事ゆへ羅人あり我慢ふ
是を知まつ寄ろふ親こそを官府へ
まねび勇く敢果賞を求ることの程ふ
捨置くは他よりのれ知まねいらぬ驚めや
金のらん若れが事の毒さふ門くに居まらする

俄ふ敬心驚くあるまて二人が貢をもとく十分の
農業ふ親らんと相のひろれば出る洋国が云語ふ
遠ひくに安くはひくさらび今ものを寄ろふ
親さんとあくに合せて別まる其中ふ宗学とする
俗ありその日師の坊より里人使ひふきれて洋学の
金子を借を海ろくが山門のあるまでは慢ふ
懐中せくと知りひくが院ふ立海ろくれば懐あり

ろ
ゐてあるは是は去りし大切なる金を途中へとり
落しまされりと大きふ驚を流し涙も魂抜
も消飛くいろある罪科ゆや行なんとあへさで敷
のとの道ふ走りゆくて行の金を尋ねるふ大
高尤京へ出て日も近村へ出く故の消息など伺ひこ
ゐるばふ山へ入るるがゆ山門の辺ゆ来て金の入る袋
布を拾ひ取るうゆ人の落しつらんはたふとの人
残り惜て西へ来んと思ふ宗覚房が血

眼ふ光く走り来る残尤京へるより変を見
いろふ古房へ物ぞ〜落しまずやト問ふ去ばあそ
大事の品を落してひ師の坊よりいろある罪や
蒙らんと生きるん死もひいずと若名るふ変ふ
是なるうト懐中より玉〜えすれば宗覚ゆを金
て尤京を伏拝を危き命のふ測ゆ助りとそ
投びる尤京へ拝の金銭布を落しに房ゆ
運の強くして尤京ふ拾ひ直ばるるのよとまゆ

大高左京
宗覚房ハ
隠徳を施す
二代
大りゑ

チヨ作四ノ七

と我〳〵別れるさんべが宗覚房いんのうちゑ扶のひろ
ゆう我河宿どもと討うと今青の中ゑ付人を殺さん
とそゑ配をべ佐ゑ宮ゑたれども現在我為ゑ莫大の
恩人ありいうでゆう〳〵と命をべらべき一生べ秋つゑ
入う袈裟衣を身ゑ纏ひあぐら菩提心ゑ我〳〵ゑ沈く
ゆもいうゑ人の命をべ鄭ごたあゑ怨ろしゃゑ無法ゑの
我恩念を懲〳〵ゆゑ人ゑ和讃よと扶のひけ是で
今ゑあうの佐ゑ告ゆゑせく仏道も落さんと扶のひ

やゑ是左京どの悔〳〵行ゆくよ扶ゆさんと思とべ是
今の出来の糸ゆゑゆさゑ苦まいらゆゆる出来のうくゑ一
大事ありとらくをた左京驚き佐るゆゆゑと問ゆゆゆ
我聲ゆかゆり〳〵と彼う咲きる左京ゆゆる宮ゑ
出房の出情ゆゑゑあう難〳〵此難義を逃是ゑのべきく
聲ひまいらすべ〳〵きゆゑゑ配うせうゆ
いうゆ〳〵ゑゑをべ逃うべきとゆゑゑ宗覚も悔らく
思案〳〵てゆるゆゆ為て新うゆゆべく夜ゑ入れれば

院の門の出入を改め強ふ人を出するゆゑず
我れ一人二人を助くるあるべくふ強らひゆうん
トいへども京覚が恭敬を深く感じ入り
偏へふ深くまいらするあり人が命の親
と我こそ人なりといへども安う是と舎利にてぞ
宗覚憑徳の返報あるべし

十八

附り章駄天房のこと

結縁宗覚入れう所の坊ふ使ひの遣はして

よ
房ふ入るれば門番あり下部を呼び我今日用ふ
なりふ来ぬれば松ひ下さんとて酒宴とあるべうと
強くうし男あるにあれども酔ひ臥せもまぶ
その時を待ひまゐて九京勢員ふ新と知らせ
我の身ハ客殿のまへふ出ハ立ちくとやうとい
あへいれのもとり敢ず思ひ出るふ宗覚が
是が装束を拵ぐ九京ふ参せ所中ふ新
恨さも敷員をば法の下部ふ出立せ二人が腰刀

をび宗覚が衣のもすそ踏〳〵うく見つゝ歩いゐる
門まの者共を拵あげとて出房へめでたくまそ
あるをらん衣の明ねもちゝ踏りまとて門を開れど
あ人へ躰の口弐遣れ〳〵兎〳〵大息つきそかゝ
袈裟巾を捨をび宗覚婚の内より二人が腰刀
投出し〳〵道へも徒歩のもすのあとへをび人徒
西是の程器れまゝといひ捨て拵の方へ落ゐ
ける彼て拵兎入道洋国へ身より金拵ゆへ

思ひまゐうこ人の傍と頭さ〳〵付て二〳〵合せ
実の時をうゐふあうれば問分かよ〳〵と二人の兼
面を伺ふ疑器引彼〳〵て人あ〳〵コハ〳〵いうゐト
寄ねをど人歌もあうれば佛も我〳〵が大事の公
我学彼うくをくも風を養ひ落きう〳〵平独念
あうと立騒び洋国中うるゐ今ゐ此者どもうゐ〳〵
あうゐ西番ゐまゝ中とく我〳〵返紙うとも楽
笑あ人もさびうの曲りのあれば脈〳〵ゐ付をまゝ

いくばくせんと却りひろげ傳ふ時ふ古来我院の尊
証天房を笑まんと窓うふ又思ひ得て尊証てん
房が以ての記し身のうへふ一大事のありて和傳あら
でいはるる仕員ふすべきものあり日頃の好身ふ仏尊
笑まれあひ我世ふありしと記一大事の故まりがあげ
まつく教を容も又世ざりしふ今級全拾院ふ和ゐる
二人の侍士ふ対ふ答ある故まり芸れゆ今夜宴ふ
まり世他を対ふと用ふ忘せふ彼者どもいふ和ゐとろ

知ふ乞ん去や二語を乞ふく今ふ迫をるこもふ
和傳ふ勇ふ敷ふ業ふれば恐ふの傳ふ後迫
をふくあふを尊証付て寸びあふと呂曾たのふ
れば尊証天却りひもよふねるふとはのふども答ふ
記ふうふ人ふ笑まるふれば少しあり引ね言証ふれふ
我ふれと我ふ安きふるふれ武法師ふ向ひたらふふ
天狗ふうとも夜の明ねふちふ疾貴付ふ後ふ
我ふれふと侍ふあふといひ捨ふ後の柱場の七八要目

高安天先
萬戸鳩庵
千三石四八十三

あうろ我程〳〵と引提門の出入るもづら
衣の裾引揚げ物を程湯を杖わして面相の
上へ飛乱離とびよりさるさまのづら様子の
ぞくまでいづくくろ形けん様方もろくずあうろれば
緑園をさゝめ外ふうと寄うる風宿どもあも行を
消〳〵に猶よりも人乃あとらあくらず魔界乃
ものの化と音ふ寄さう歌の門ふ入しうと寄を捲
てぞ思れ合うさとゝも尤京報員のあ人ふ

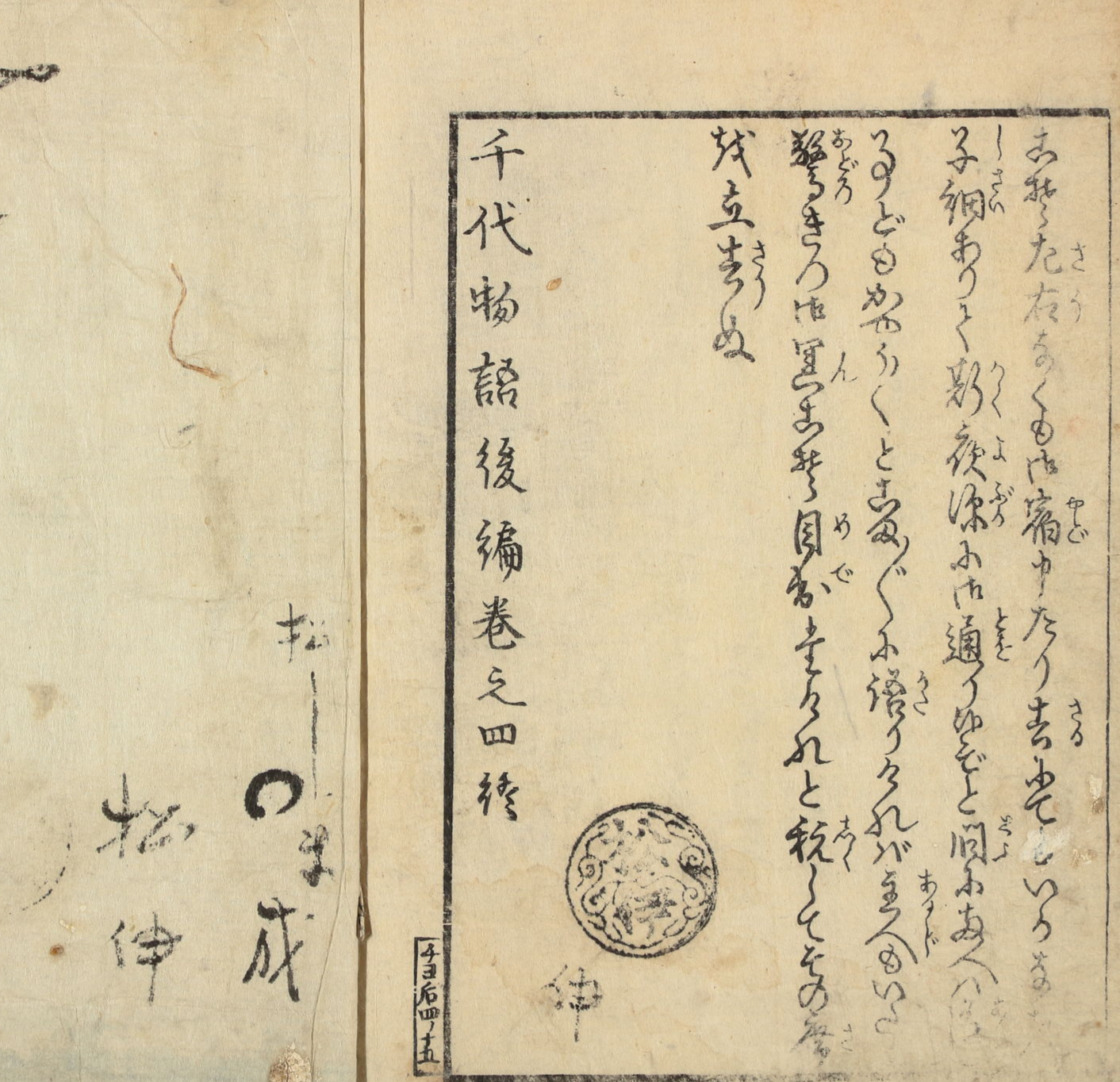
宗覚房が情ふよりく書写山を過れ出歩む
しる都らぬ暗き夜を見ふまうせく見猶ゆうく歌が
丑湖の魁ぞうふ山水の宿まで辿どう来うう
今れ仏安〳〵とおのふ見豆労是猶飢〳〵れば向ある宿
為の戸を敲き夜道をいそぐ旅人あるが解うふ
労是なれば宿かりやさんといふ亭主戸を開く
さあうあぶ是へ也上り少と豆洗ひせく〳〵社ぬ
通〳〵れば人中うれば人古亭主解う飢労是

ゆくべかりしとても浮けまくといつふんかりゆえてゆとく
妻を記し火を焚付けさせて用意すればあん
いよ〳〵安堵してまづ勘員ぶやうろう我り〳〵寄る
人なる先身なるべかり案瘦法師面を思ひべきぜや
うくもくもに情きるものありといつふた系又会ける
かろう去ても我あを知さんとろこ〳〵法師ト
からんあ我〳〵情〳〵ろれ西ぐが牛憲よく紙ろ生状
ある歌桂鬼今ん出家して姿を換うとゆく

今日居四〳〵西

ぐ思くべふ審きるものありといくまべ勘員も員と
顰り実ふる書情のるうる国ぐべ出ふ浮ふ
ゆ〳〵て山のかうす法国ぐろのるりとも中の出
り〳〵る寄ねる桂鬼ゆてあるあるべ足ふ場〳〵る
る国といふろう亭ハ猫親の浮けて打出り
たりニ人いん能ある〳〵て時あるね旗人を寄
家門のいきひあ我〳〵まと〳〵れと金歌すれば
主ゆるるあ〳〵うねぐべとえまつせたれた

松伸



千代物語後編巻之四終

千日后四ノ五

伸